

第3回むつ市総合教育会議議事録

開催日時: 平成 27 年 12 月 15 日(18:30~19:30)

開催場所: 大畑公民館 集会室

出席者: 宮 下 宗一郎 市長
高 瀬 厚太郎 教育委員長
宮 浦 雅 子 教育委員
村 中 一 文 教育委員
納 谷 順 子 教育委員
遠 島 進 教育長

事務局 古 川 教育部長
寺 島 政策推進監
畑 中 理事図書館長事務取扱
坂 井 理事大畑公民館長事務取扱
阿 部 副理事学校教育課長事務取扱
木 村 副理事生涯学習課長事務取扱
石 澤 川内公民館長
金 浜 脇野沢公民館長
櫻 井 図書館総括主幹
澤 田 中央公民館長補佐
立 花 総務政策部政策推進課主任主査
高 杉 教育委員会事務局総務課長
山 中 教育委員会事務局総務課総括主幹
澁 田 教育委員会事務局総務課主幹

1.事務連絡等

事務局： 定刻となりましたので、これより、第3回むつ市総合教育会議を始めさせていただきます。

司会は、宮下市長をお願いいたします。

宮下市長： それでは、始めに少しお話をさせていただきます。

今日は、地域の方々あるいは父母の方々に多く来ていただいているようでございますので、できれば、皆さんから御意見をいただく場面を、最後に時間の許す限り持ちたいと思っています。

前回までの議論から、少し時間が経ちましたけれども、その間、私は「ふれあい野球教室」に参加しました。

これには市内・下北の小学生が100人ぐらい集まって、西武ライオンズのプロから指導を受ける場面がありました。その中で、西武ライオンズの元ピッチャーでコーチも努めていた橋本武広さんという方が、「この地域の野球レベルは低い。」とズバリおっしゃって、そのことについてドキッとしました。

何が悪いのかといえば、子どもたちというのは、基本的にどこで生まれても、能力が高い子は能力が高いし、素質がある子は素質がある、それを伸ばす環境かといったらその通りだと。

子どもたちの可能性は無限だけれども、それをどうやって伸ばすのかということが、地域、家庭、さらには学校教育現場がしっかりとした形を取らなければ、プロは輩出できない。

我々の目標は当面、当地から甲子園へ、という話をしていましたけれども、そういうことですらおぼつかないと言われました。

プロで活躍する人の言葉というのは非常に重くて、子どもたちも刺激になったのではないかと思うし、そうやって耳の痛いことを言われて子どもたちの目が変わって一生懸命やっていたという様子も見ましたので、これは野球だけのことではなくて、教育全般に言えることなのではないかと思っています。

ここ大畑ですけれども、大畑町は古くから教育の町として、たとえば神社を寺子屋のよ

うにを使って、小さい子どもに読み書きそろばんを教えていた、そんな時代もあったと聞いています。そして、戦前戦後を通じて多くの人材を輩出した土地柄であると認識しております。

そういった大畑地区でこのように総合教育会議を開催させていただく、ということですから、今日は、学校教育を中心に議論を進めていきたいと思っています。

それでは、第3回むつ市総合教育会議を開催いたします。

事務局から、配付資料の説明と事務連絡をお願いいたします。

事務局： (配付資料説明及び事務連絡)

2.議事

宮下市長： それでは、次第に沿って会議を進めます。

次第2の1点目、幼児教育についてですが、この点に関して事務局から説明をお願いします。

事務局（高杉総務課長）： 幼児教育に関する部分について、説明をしたいと思います。

前回までの会議の中で、幼児教育について議論を重ねてきましたが、むつ市においては、来年度から公立の保育所は閉所し、全て私立の幼稚園・保育所となり、市として直接的に幼児教育に関わる場面はなくなります。

一方、各幼稚園・保育園においては、それぞれ特色あるすばらしいプログラムにより、幼児教育、保育を担ってもらっております。

市としては、各幼稚園・保育園の取り組みを最大限に尊重して、側面的なものとなりますけれども、支援を継続していく必要があると考えております。

しかしながら、幼児教育と学校教育の間には「小一プロブレム」といわれる段差が存在し、小学校入学後、学校生活になじむのに時間を要する児童が少なからず在籍することも事実であります。

前回の議論の中では、幼児教育と学校教育

の間のギャップ緩和に向けて、市として現体制で何ができるのか、また、教育現場のみならず家庭や地域の関わりについても議論することができました。

その中で、教育機関、家庭、地域で担うべき役割と、小学校入学までに身につけてほしい生活習慣、モラル等の社会性について、共通認識として持つ必要があり、事務局としては、共通理解を深める場として「幼保小連携に係る協議会」の設置について提案したところであり、大綱にも盛り込んでいきたいと考えております。

資料の1ページ目に大綱に盛り込む案として示しております。

現在、長期総合計画の幼児教育に関する記述は、上の3行でしたが、これを、下段の記述に改めたいということで、提案させていただきます。

以上です。

宮下市長： これは、前回の議論を踏まえてこのような文章になってございますので、特段異論はないと思いますが、よろしいですか。

(特に異論なし)

それでは、次の議論に進んでいきたいと思っております。

学校教育に関する部分に移りたいと思っておりますが、この点に関して、事務局から説明をお願いいたします。

事務局（阿部学校教育課長）： 御説明をいたします。

事前に資料を配付しておりまして、今回はたくさん意見を頂戴することがメインとなっております。

そして、今日来ていただいた傍聴の方からの御意見もいただく時間を取りたいと市長からもありましたので、事務局の説明は簡略にして、御意見をいただく時間をたくさん取りたいと思っております。

一枚物で「協議資料」をお渡ししてあります。その資料の1番は、私たちが考えている、市内の小中学校の学校教育における現状です。

2番は、現在考えられている課題です。

3番は、今後望まれる方向性です。

順次お話をいたします。

1番の状況につきましては、幸い小・中学校とも落ち着いた学習環境の中で充実した学校生活が営まれております。

長い間、むつ下北では「学力の向上」、「生徒指導の充実」この2点が大きな課題ととらえられておりました。

子どもたちと教職員の努力と、保護者の支援により、この2つの課題が、現在望ましい水準に回復を見ている、そのように認識しております。

そして、3点目に「教育活動の成果が十分に保護者及び地域に理解されている」とは言いながら、「と書きましたが、一例を挙げれば、小中一貫教育に、全中学校ブロックが取り組んでおります。

しかし、このような合同行事をしてこのような成果がある、ということは、学校の中では分かりますが、それをしっかりと保護者の方々に、そして地域の皆さんにお伝えするという努力を、十分に果たしてこなかったと考えております。

その他にも、現状に対して色々な御意見や御質問があると思っておりますので、後ほどちょうだいできればと思っております。

次に、現状の課題ですが、大きく3つ考えています。

ひとつは、より高い目標に向かう意欲、気概に欠ける傾向が払拭できてはいないと考えています。

5年前に学力テストを行った際には、むつ下北地区の子どもたちの学力は、小学校も中学校も全教科平均を下回っておりました。

そして、子どもたちが5年間頑張ったおかげで、今ではほとんどの教科で、小学校も中学校も、県の平均を大きく上回っています。

しかし、一方で、もっと上を目指そうという子どもたちがたくさんいるかという、途中であきらめてしまう子どもが多いように思っておりますので、自分の目標に向かって自分で一生懸命頑張っていく、そういう人間を育てたいと考えています。

従って、小学校も中学校も落ち着いた状況にありますが、これはゴールではあ

りません。子どもたちを頑張らせるための必要条件がやっと整ったと認識しておりますので、そうした土台に立って、自分の目標に向かって一生懸命頑張っていく、そういうしっかりした人間をつくりたい、そして、まだそこに至っていないということが課題だと思っています。

2点目には、算数の学力の向上についてです。

先ほど申し上げましたが、全ての教科が大きく伸びていますが、伸びた中でも算数に関しては、伸びが若干小幅になっています。5年間頑張って小幅な伸びに止まっているので、方法を新しく変えてみんなで頑張っていこう、そう考えなければなりません。

そうしたこと等において、現時点で解決できていない課題も若干あります。

それらのことについて、解決方法を具体的に、私たちも、教職員も、子どもたちも理解し、みんなで頑張っていこう、そうした体制に関しては、十分に構築されているとは言いがたい、現在の課題だと考えております。

課題の最後になります。小中一貫で、小1から中3まで9年間連続して育てようと思っております。

子どもたちは連続して成長します。それをしっかり支えようと考えていますが、最初の年度でしたので、小学校5年生から中学校1年生までの中期3年間に重点化して取り組んできました。その結果が中学校の学力向上、小学校の生徒指導の充実であり、大きな成果を得ることができました。

しかし、重点化した中期以外の小学校1年生から4年生、中学校2、3年生においては、これからもっと伸びる余地があるだろう、これまで中期で成し遂げた成果を、前期・後期にも伝えていくことがこれからの課題と考えています。

3の今後望まれる方向性ですが、ふるさとに愛着と誇りを持ち、広い社会で活躍できる人材の育成に努めたいと考えています。

生まれ育ったむつ下北を愛し、どんな

社会に出ても自分で頑張っていく、そんな人間に育てたいという願いです。

2点目に、「校種間の接続等」とありますが、幼稚園・保育所から小学校、あるいは小学校から中学校、そうした環境の違いは成長のための大きなステップと考えており、子どもたちが大きなつまづきを味あわないよう、教職員が中心となって十分な指導の準備をして、大きな成長を促したいと考えております。

これは小中一貫教育の当初から考えられていたことですが、再確認する時期だと考えています。

3点目に、全ての児童生徒に義務教育で望まれる学習だけではなく、全ての活動について十分な力をつけさせたいと考えています。そのことに加え、これまでと同様に意欲のある子どもたちには勉強であれ活動であれ、色々な場面で最大限その能力を伸ばせるような学校にしていきたい、そういう願いを持っております。

4点目の、小学校中学年における活用型授業とありますが、ベースラインの学力を活用するための授業をしっかりとやらないと、今世の中に出てもなかなか活躍できないと認識しておりますので、小学校中学年から中学校につなげ、子どもたちの可能性を開いていきたい。

そして、先ほど幼保小連携の話がありましたが、幼保からのアプローチカリキュラムの取り組みがありますが、幼保側から「赤ちゃんじゃないのだからもっと厳しくしてほしい。」という声があります。幼保で身につけた力を十分理解したうえで指導に当たること、それぞれの能力をより高めることができると考えます。

最後に、高等教育機関や地域の教育資源を活用した体験的活動、とありますが、大学など、高等教育機関や漁協など地域の力をお借りしながら、実際に子どもたちが体験的活動をとおして、学ぶ目的をしっかり持って、意欲を高めていく、そのような教育が、特に中学校2、3年生においては重要だと考えています。

考えていることの全てではありません

んが、お話をいたしました。これから議論する中でたたき台として学校教育のあるべき方向性を定めていきたいと思いをします。

宮下市長： ありがとうございます。

詳細、御説明いただきました。今日は、このペーパーに基づいて議論してみたいと思いますが、まず、2つに分けて考えてみたいと思います。

まず、今の課題を洗い出していけば、望まれる方向性が見えてくるのではないかと思いますので、現状の課題について、各委員から御意見をお伺いしたいと思います。

遠島教育長： むつ市の学校教育についての課題ということですが、むつ市の小学校、中学校の学力が非常に大きく伸びています。これまで一生懸命取り組んできた成果、とりわけ小中一貫教育に取り組んできた成果だと思っています。

学力だけではなくて、学力を伸ばすには生徒指導面、生活面が身につけていないと学力を伸ばすことができないのですが、まず、それが落ちてきたことから学力が伸びてきたと思っています。

伸びてきたのでそれでいいかという、私はまだまだそうではないと思っています。

もちろん全国や、県と比べてどうかということもありますが、学力というものを、ただ単に学習状況調査の点数だけでとらえるのではなくて、たとえばこれから高校入試がある、高校の後には大学があるというときに、他の地区の生徒と競争して、勝って自分の力を発揮して目標を達成していける、そういう力をつけてやるのが、今一番必要なことだろうと思っています。

高校入試などの点数について、学力調査で上がった分、そこも上がっているとはまだ言えないところがありますので、実際の場面で活用できるような学力をつけることに、これから全力を尽くしていかなければならないと思っています。

以上です。

納谷教育委員： 私には、今小学校と中学校の子どもがいます。

川内は小学校、中学校が併設の小中一貫校で子どもたちが学んでいます。

課題のところにも小学校5年生から中学校1年生の取り組みが定着、と書いてありますが、低学年、中学年の子どもたちが、生活の授業の中で「川内のまちのことを知ろう」という課題のもとに、各班に分かれて歴史、産業、土地のことを学ぶ、調べるということがあって、川内の中で歴史をよく知る方のところに先生が引率してお話を聞いたり、川内の川の水質検査をしたりという活動をしています。その成果を参観日に保護者、協力してくれた地域の方を呼んで発表したのですが、学校に来てくれた地域の方からも、子どもたちが川内のことを学ぼうとしてくれることがとても嬉しいという声がありました。

また、水質検査は中学校の理科の先生と一緒にしたのですが、検査に携わった生徒は、理科に興味をもって、すごく楽しかったと。

これから高学年、また中学校に進学し理科、社会等、これから学ぶステップのひとつとして小学生、中学生が共有できる、それが小中一貫教育のいいところだと思いました。

今は、小学校5、6年生と中学生と一緒に活動することが多いのですが、小学校低学年も中学年も、中学生や中学校の先生と一緒に何かをするという機会も非常に大切だと感じています。

宮下市長： ありがとうございます。

その点で思ったのですが、学校教育課長にお伺いしますが、低学年の子どもたちが上の子たちと活動するということは、下の子どもたちにいい影響があるということですが、考えてみると、中学生にとってその時間というのは、どういふふうなことになるのでしょうか。

要するに彼らは上を目指さなければならぬということがある中で、そのような活動をするというのは、どういう整理になっているのでしょうか。

事務局（阿部学校教育課長）： 先ほど教育長も申し上げましたが、生活の安定が学力の安定

に直結します。

そして、下級生の面倒を見るというのは、「自己肯定感」というのですが、自分を認めてもらう、そのような欲求があります。

下の子は上の子に面倒を見てもらうのは楽しいし、上の子は頼られることにより人間性が育っていきまして自分に自信を持って、色々な活動に一生懸命がんばれる人間に成長する。そうした多くのメリットがあります。

宮下市長： ありがとうございます。

そういった観点を含めて、医師でもあります村中委員からお願いいたします。

村中教育委員： 資料を見て考えたことですが、今後求められる方向性の中に、「ふるさとに愛着と誇りを持ち」とあります。「愛着と誇り」と並列で書いていますが、中身がだいぶ違うんですね。

「愛着」というのは感情ですので、自然発生的なもので理屈抜きのもので。教育によって生まれるものではない。

「誇り」というのは理屈です。誇りとするものはこういうものである、と教えてあげないといけない。やみくもに「誇りにしなさい。」といってもしょうがないわけで、このあたりをどうしていくのかと。

低学年の子どもたちが誇りに思えること、あるいは高学年で誇りに思えること、それぞれ違ってくるのではないかと思います。

たとえば、郷土の自然を誇りに思う子どももいるだろうし、先人がやってきたことを学んで、それを誇りに思う子どもたちもいるかもしれない。あるいは、市でやっている活動を見て、それを誇りとする子どもたちもいるかもしれない。

そういうことを、子どもたちの成長に合わせて、誇りにすべきものは何であるかを教育していくことが大事だと思うし、それを私たち大人がちゃんと見つけていかなければならないと思っています。

さらに、子どもたちが誇りに思えるよ

うな大人としても生活していかなければならないと考えさせられました。

宮下市長： ありがとうございます。

次は、地元大畑の宮浦委員からお願いします。

宮浦教育委員： 課題の1番「より高い目標に向かう意欲」というところですが、私も、今の現状でそこそこできればいいというところでおさまってしまう子どもが多いと思っています。

自分自身で高い志を持ってできるような子どもを育てるにはどうしたらいいか、ということについて、常に思っています。

自主性に欠ける、指示待ち、そのような子どもが多いというのは、まさしく課題のひとつだと思います。

子どもの可能性を伸ばすときに、引っ張り上げるのは容易ではありませんが、子どもが自分から頑張れば、すごい力を発揮するので、うまくやる気を引き出せたらすばらしいと思っています。

そのような教育を進めるために、地域や学校がどう関わっていくのかが課題だと思います。

先ほどの、川内の「地域を知ろう」という取り組み、歴史、産業、文化を地域の人から教わるというのは、大畑でもぜひやりたい。地域の人材、文化、産業などの資源を全部取り込んで、子どもたちに十分教えてあげたいと思います。そういうことを分かったうえで、子どもたちが誇りを感じ、大人から愛情を注がれて育ち、栄養を十分蓄えて次のステップに進む。そして、力をつけてふるさとに戻ってきてくれる、あるいは広い世界で活躍してくれる、そんな願いを持っています。

宮下市長： ありがとうございます。

次は、高瀬委員長お願いします。

高瀬教育委員長： まず最初に、前回の会議で市長がおっしゃいました、「教育再生首長会議」の中で「教育再生こそ地域再生」という部分

に、私も共感しまして、私の考えと同様だということで、意を強くしています。

その裏には、これは国の単位になると思いますが、GDP に占める教育に対する公的支出の割合が OECD 加盟国の中で最低だと。幼稚園保育園から大学までいこうと思っても、それぞれの教育段階における私費負担が OECD 加盟国の中でも、日本が圧倒的に多い(日本:30%超、他国:16%程度)のです。つまり、日本は教育にかかる家庭の負担が大きい国だということです。

むつ市も財政が非常に大変ですけれども、だからこそ「教育再生こそ地域再生」ということが逆に言われるのではないかと私は考えていました。

極端な言い方をしますと、教育格差は将来の階級格差あるいは所得格差に繋がると。もちろん断言はしませんが、そのような格差を生む要因にはなるのではないかと思います。

そうすると、いかに教育にお金をかけるか、という根本的な意味がそこに出てくると私は思います。

それから、教育に集中できる環境、これは先生方の立場で、また児童生徒の立場で学習に集中できる環境づくりについてです。一方には財政の支援が必要だということではありますが、環境作りは大事なことだと思います。

ひとつの例として、むつ市と交流のある台湾の陽明中学校では、放課後、学校に併設した図書館があってそこに子どもたちが流れてくる。聞いてみたら、PTA や OB の方が 10 人ぐらいいらっしゃって、生徒の苦手なところをボランティアで教えている。そのような環境づくりに、ひとつのヒントがあるのではないかと、思っています。

ですから、財政支援が必要だし、日本の現状も知ってほしい、それから環境づくりも重要だと思います。

宮下市長： ありがとうございます。

私もそのとおりだと思います。

まさに「米百俵」というか、苦しいときこそ教育に、という気持ちで私もいま

す。

お金のかけ方の問題もあるわけですが、どういったところに重点配分するかということは大事だと思います。

今のお話にもありましたが、台湾の陽明中学校で、PTA や OB の方がつきっきりで教えるボランティアということを経験として考えた時に、学校は本当に一生懸命やってくれていると思います。ただ、塾も含めて学校以外で、東京と同じ環境は望めないですが、それに近い形があるかどうか、ということも少し疑問がある。

さらに、先生から OECD の話をいただきましたが、格差というもの広がる一方だと思っています。

ですから、ある一定の段階でそれを元に戻すような大きな改革、あるいは方針の転換、そしてそれを現場でしっかり実行していくということがなければ、結局は教育の格差がおそらく経済格差を生んでいくということですし、果たしてこの街が経済的にどうかといえば、そういうところから起因しているものもあるのではないかととらえている部分もあります。

そういった問題意識を、私も共有しているということは申し上げたいと思います。

それでは、今委員の皆さんから御意見をいただきましたけれども、まとめる前に、参考意見ということになりますが、会場の皆様から、今思っている学校教育の課題について御意見があればいただきたいと思っています。

(特に意見なし)

よろしいですか。

委員の皆様からいただいた御意見を少しまとめてみますと、おおよそ、今後望まれる方向性というところにたどり着くような気がしております。

先ほど、望まれる方向性ということで、5 点ほど挙げていただきました。

実は、決してこれだけではなくて、資料の中で「新むつ市教育プラン」というものがございます。

これが学校教育についての基本的な計画ということになっていますが、これを中心に考える。そして、これにこれから加えるとすると、今後の方向性に示した5点であるというふうに意識していただきたいと思っています。

そのような観点で、ひとりひとりから今後望まれる方向性、この具体的な内容についての御質問という形でもけっこうですので、御意見をいただきたいと思っています。

遠島教育長： 今後望まれる方向性、ということですが、委員の中からも、子どもたちが自主的に勉強したくなる体制をつくるのが大切ではないかというお話が出ましたけれども、まさしくそのとおりでらうと思っています。

先日、弘前大学大学院医学研究科の高橋一平准教授とお話をする機会がありました。

私は、田名部高校に勤務していましたので、田名部高校の生徒のことについての話になりましたが、医学部の中で田名部高校出身の医学生が非常に評判がいい、学ぶ意欲があると褒めていただきました。

そのことを考えた時に、田名部高校では、成績に合わせて自分がいきたい学校を決めるのではなく、何のために勉強するのか、何をやりたいのか、そのために何を学ぶのか、しっかりと目的を持たせて進学をさせているという状況があります。

目的を持つことで、それまであまり勉強をしなかった生徒が、何もしなくてもひとりで勉強するようになる、という状況がありました。

たとえば部活動も一生懸命やる、家で勉強する時間がない、そういう生徒はどうするかというと、10分休みなど隙間の時間を使って勉強する、また、家で勉強する時間がないので、授業中に全て理解するようにする、という生徒もいました。分からないところも当然あるわけですが、そのときはすぐ先生に聞いて理解をしていくということです。

結局、今後望まれる方向性の5点目、「高等教育機関や…」というところの「学ぶ目的の明確化」と書いてありますが、これが大事だと思っています。

そして、これはどういう教育でやっていくかということ、具体的にはむつ市教育プランの概要にもありますように、「キャリア教育」に力を入れていく必要があると思っています。

だいぶ前になりますが、市長が田名部高校で講演してくださいました。そのときに話を聞いた生徒の中に、非常に感動した、と感想を述べてくれた生徒がいました。この生徒は、きっとそれに触発されて色々なことを自主的にできるようになるのではないかと考えています。

したがって、そういう子どもたちの心を揺さぶるような機会を多く作ることが必要だろう、そのためのキャリア教育に力を入れていきたいと思っています。

宮下市長： ありがとうございます。

次に納谷委員お願いします。

納谷教育委員： 学力を向上させるためには、生活習慣や生徒指導が大切になると、先ほどからお話が出ていますが、私の子どもも含めて、先ほど宮浦委員がおっしゃったように、自主的に動く子どもたちが少ないように、私も感じています。

私が小学校、中学校に関わって思ったのは、一日のスケジュールをみると、朝自習があって授業があって中休みは何分、というふうに事細かに分刻みで決められていて、それに乗っ取って子どもたちが動いている。それはそれでいいと思いますが、自分たちで考えて行動するというカリキュラムにはなっていないのかなと感じました。

ですから、子どもたちにはもう少し自分たちで考えて、今こういうふうにするべきだろう、こう動くべきだろうと、自主的に動けるような教育というのも、保護者も含めて、学校も一緒になって取り組んでいけたらいいと感じています。

宮下市長： ありがとうございます。

次に、村中委員をお願いします。

村中教育委員： 色々とお話を聞いて、自主的に勉強しようとする子どもを育てるということは、非常に大事なことだと思いますが、なかなか簡単にはできないと思います。

ただ、自分の子どものころのことを考えてみますと、ヒーローにあこがれると子どもは頑張りたくなる。頑張ったらあんなふうになれるのかなど。そういうものがあると子どもは目を輝かせ、やる気を出す。それがあまりにも遠い話だと大変ですけども、今これをやって積み重ねればこんなことができるんだよと教えてあげて、子どもたちが頑張ってみようと思えるインフォメーションを与えてあげるのも大事だと思います。

たとえば、羽生結弦選手があれだけの高得点をたたき出しましたが、羽生選手は何歳の頃からスケートをやっていたんだろうとか、どういう環境でどういうことをしていたんだろうとか、あるいは有名なピアニストだとかアスリートとか、ノーベル賞受賞者もいます。色々な形のヒーローがいますが、その方たちはどういう子ども時代を過ごしてきたんだろう、というふうなことを子どもたちに教えてあげる。そして、自分もそうなりたいと思う子どもを育てるのもひとつの方法かと思います。

また、何をしても楽しければ人間は育ちます。楽しいとどんどん伸びるので、いかに自分の学んでいることが楽しいのか、そう思える工夫も大事だと思います。

方法は色々あると思いますが、たとえば小テストで何回も満点を取らせて満足感を与えたりとか、自分がやっていて楽しいと思えることを子どもたちに教えてあげる、という部分が大事ではないかと考えています。

勉強が楽しいと思うのはなかなか難しいかもしれませんが、これをやってよかったという瞬間を感じられる子どもは次のステップに進めるのではないかと思います。

宮下市長： 今最初におっしゃっていた、ヒーローにあこがれるというのは、言ってみればキャリア教育という意味ととらえていいでしょうか。

村中教育委員： それもひとつだと思います。それが、自分の目標とできる身近な人でもいいし、子どもたちは、遠いヒーローにあこがれてしまうけれども、そういう色々な段階の子どもが、こんなふうになりたいと思えるものを、大人が提示してあげることが大事だと思います。

宮下市長： 本当は身近な人に教室に来てもらって、自分のことを話してもらえば、子どもの目が輝くのではないかと思いますので、そういうことは、これからはしっかり続けていきたいと思います。

次に、宮浦委員をお願いします。

宮浦教育委員： 皆さんから、とても興味深い御意見を伺いました。

今後望まれる方向性ということでは、教育プランで学力向上について一生懸命やっていますが、色々な子どもがいる中で、学力を伸ばすのに時間がかかる子どももいると思います。そういう、点数には結びついていない子どもたちも、世の中で十分活躍している場合もあるので、色々な子どもたちが共生し、楽しめる学校でなければいけないと思います。

点数に反映しない学力もあるのではないかと思いますので、ステップを踏んで、最後には社会で活躍できる、郷土に貢献できるという「生きる力」をつけてほしいので、みんなが元気になれる学校であってほしいと思います。

宮下市長： 学力も含めトータルで生きる力、「人間力」というか、そのようなものをいかにつけるか、ということが重要ということですね。

宮浦教育委員： 算数ができる、英語ができる、という力は、最終的には生きる力、人間としての力になってほしい、なるべきだと思います。

宮下市長： ありがとうございます
次に、高瀬委員長をお願いします。

高瀬教育委員長： 興味深い話がいくつかありま
した。

まず、教育長がおっしゃった「学ぶ目的の明確化」、これは非常に大事なこと
だと思います。

勉強については、常に向上させるのは
難しいので、高みを目指せるのは、目的
があるから目指せるのであって、目的を
持たないとどうしてもそこで止まって
しまう。

ですから、目的を持たせる指導が必要
かなと思います。

それから、現実には、現状値を先生も
生徒自身も分析ができて、そして何年後
の自分は1を5にしたい、というような
目標値を定めて、到達可能な夢を周りが
与えてやるのが大事ではないかと思
います。

青森県の健康のデータも現状値と目
標値を定めていて、到達可能かどうか、
毎年分析しています。そういう手法は、
教育にも当てはまるのではないかと思
いますので、子どもたちも先生方も、現
状と目標をきちんと把握できれば、目指
すものが見えてくると思います。

また、地域で活躍している方がたくさ
んいらっしゃるので、そういう方を学校
現場のゲストティーチャーとしてどん
どん入れて、子どもたちがわくわくする
ような話をしてもらい、そういう取り組
みを各学校で取り入れてほしいと思
います。

最後に、子どもには、早い時期から机
に向かって集中させる訓練をさせてほ
しいと思います。

以上です。

宮下市長： ありがとうございます。

ゲストティーチャーという話は、政策
的にも前向きなので、是非検討してほ
しいと思います。

この今後の方向性の1番から5番ま
でを見ていて私自身が感じたのは、皆様
から「目標を持たせる指導」という意見

が多かったですが、何を指すのかとい
うところを明確にするべきであると。

ひとつは「県のトップレベル」とい
うのはこれまで言ってきたところですが、
そろそろその尻尾が見えてきている気
がする。

そうであればこそ、「全国のトップ」
を目指してやるのが肝心だと思うし、
一にも二にも競争環境を子どもたち
につくってあげるといことが大事な
のではないかと、私は思っています。

私たち大人が子どもたちに伝えら
れるのは、どう考えても大人の社会は必ず
競争社会だということです。どんな団体、
組織に所属していたとしても、それは競
争の中で勝ち抜いて職責が上がって
いくということもあるし、色々な業界
の中でも必ず上下のランクがつく。

もちろんセーフティネットは必要に
なってきます。

学校現場の話を知ると、スクールサ
ポーターですとか特別支援学級、そう
いったことでのセーフティネットとい
うのはある程度できている。そして全
体の平均点が上がり始めている。

次は何を目指すのかというと、やっ
ぱりその先を目指さなければいけない。

それは、子どもたちだけが目指す
のではなくて、冒頭の話でもあった
とおり地域社会が目指すべきだし、
学校現場が目指すべきだと私は思
うわけです。

それで、大人になってから気づく
というのでは遅いと思いますが、特
に、首都圏とこのむつ下北地域との
圧倒的な違いは、その環境がない
ということだと思っています。

ですから、できるだけそういう環
境をつくるようなことをやってあげ
たい。

大畑でいくと、本当に小さい小
学校があります。それが、地域の人
たちにとってどうかという以前
の問題として、子どもたちにと
っていいかということも、私
たちは真剣に考えてあげなければ
いけないのではないかと
思っています。

それは大畑だけではなく、他の
地域も全部含めてですが、突然
競争の荒波に出しても生き残る
子もいるでしょう。けれ

ど、少しずつそういう環境になれさせるという意味も、おそらく学校という社会の中にもあると思いますので、そういった部分も是非この大綱に盛り込んでいただきたいと思っています。

そして、この大綱はつくって終わりということではないと思っています。大まかな方針をしっかりと打ち出す。そのうえで毎年目標をつくって、その目標を管理しながらやっていく、そういうことが必要だと思っています。

さらにいえば、教育行政というのは、本当によい改革だとしても、急激な変化というのは避けるべきだと思います。

この一年半、様々のことをやってきましたけれども、それと教育というものは本質的に違うと思っています。なぜかといえば、子どもたちと向き合っているのは私ではないからです。子どもたちに向き合っているのは先生だと。そこにワンクッションがあって、子どもたちと向き合う先生一人一人が、その改革をポジティブに受け止めてそれを主体的に実践するという内容でなければいけないと思いますし、そのための時間と手順というものはしっかりと踏むべきだと思いますが、ただやはり、目指すべき方向性を私たちがしっかりとつくってあげて、そのうえで目標管理をして、現場を巻き込んで子どもたちを伸ばしていく、ということはぜひとも必要だと思っています。

そういった中で、高瀬委員長からいただいた「ゲストティーチャー」の話ですとか、あるいは村中先生からいただいた「ヒーローの役割」、これもいわゆるキャリア教育だと思います。教育長からもそういうお話をいただきました。さらには、納屋委員からは「自分たちのことができるように」という話、そして宮浦委員から「人間的な力」をしっかりと蓄えてほしい。そういうことをトータルでやるということが必要だと思っています。

あえて、今日は「今後望まれる方向性」をどう変えてほしいとは言いません。

ですが、今日出た意見を踏まえて、これに肉付けをしていただいて、次回の総

合教育会議に持ってきていただきたいと思います。

私からは以上です。

本日は寒い中おいでいただき、ありがとうございました。

今日いただいた御意見は、大綱として少し凝縮してとりまとめてほしいと思います。

これをもちまして第3回むつ市総合教育会議を閉会いたします。

なお、本日の協議内容、経過につきましては、議事録を作成し、むつ市ホームページに掲載することにより公表することといたしますので御了解いただきたいと存じます。

また、次回の開催につきましては、事務局で日程調整のうえ御案内いたしますので、御参集をお願いいたします。

本日は遅い時間まで誠にありがとうございました。

